道路ユーザーネットワーク広場

NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK

☆三好礼子の☆ ナチュラル・ロード

「頑張れ萌ちゃん！」。みんな娘と重ねて応援しまくり隊に。

三好礼子
エッセイスト・元国際ラリースト
～ http://www.fairytale.jp/ ～

笑顔たまらん！　カフェのステッカー見かけたら声を掛けてあげてくださいね。

1ヶ月前、カフェに素敵なお客様がやってきました。横浜から日本一周ツーリングに出て5日目の小島萌さん。なんと21歳。春からは北海道で就職が決まっているので、その前にカワサキの250ccで半年ほどかけて心向くままに旅を続けるのだそうです。ほっこり人を幸せにさせる笑顔にKOされた私や居合わせたお客様は、みんな瞬時に応援隊に変身。関東から来ていたライダーさんは、ハンドルバーにある折れたキルスイッチ（エンジン停止装置）をあれこれ見てあげ、長野市のバイクショップオーナーさんは、その養生（旅の終わりまで修理不要なまでカバー）だけでなく、なんと自ら乗ってきたバイクのクラッチレバーを、転倒で折れていた萌ちゃんのレバーと交換。この日に限って同じバイクで来ていたのだから、彼女のパワーが伺えます。

カフェに展示しているバリタカマシンと同じ1997年生まれの21歳。

私はランチをご馳走する代わりに山盛りインタビュー♪　同じ大学の冒険部にいたという兄の影響でバイクに乗り始め、自転車から始まり、ライヴ追っかけ夜行バスの旅、そしてレンタル原付バイクでの2週間三千キロの北海道ツーリング（19歳）と、とにかく知らない土地に行ける旅が大好き。一年半前に中型免許を取得して、すぐに四国一周の旅に出たので、ライダーハウスやゲストハウスで、世界を回っている様々な人ともたくさん繋がったそう。我がカフェを紹介してくれたのも、まさに今モンゴル辺りを走っている世界一周ライダーさん。当然、いつか世界一周にも行きたいとニッコリ。

福井県の三方五湖の有料道路パーキング。エストレヤ（星の意）にキャンプ用品や夢が満載。

クラッチレバーを交換中の小林さん。ふと、童話「しあわせな王子」を思い出す。

母が一人の手で兄妹を育ててくれたそうです。どちらも奨学生で、旅の費用もちゃんと計算しての冒険といえ、娘は何かと心配だろうなあと思っていたら、母親から渡されたという護身用グッズ3つを見せてくれました。55歳。私が18歳で日本一周ツーリングに出た時、我が母は50歳。そして今私は60歳。なんだか急に胸がきゅーんとなってきました。あの時もいろんな人にお世話になったけれど、きっとこんな気持ちで見守ってくれていたんだなあとしみじみ。

最後に「今まで行ったところで何処が一番よかった？」と聞くと「ここです！」。「え？」「ここです」。一万二千キロ走った中で、このちっぽけなカフェが一番いい？　嘘でしょっ。居合わせたオジ様やオバ様たちが暖かく見守っていたからでしょうが、心で泣きました。きっと平年間で何十何百という「ここ一番」が出てくると思うけれど、また戻ってきたい候補にあげてもらえるだけでカフェ冥利。改めて、旅人の先人として残せるのは、後人への知恵や指南を飛び越えた「愛」なのだと確信。そして見送った私たちは、なんとも幸せな気持ちになったのでした。その日の夕暮れは本当に美しく、アルプス山麓のキャンプ場で彼女も見ているのかなあと思いながら、いかに彼女から頂いたものが大きかったのかを知りました。若い子の旅は素敵ですね。でっかいソーラーバッテリーチャージャーを荷台に広げながら走るも、道路地図帳をメインに旅していた萌ちゃん。日本中に笑顔の足跡を残してきてね～♪

岡山県の県道で甲羅干ししていた亀を救出。すぐにトラックが通ったので、間一髪だったかも。

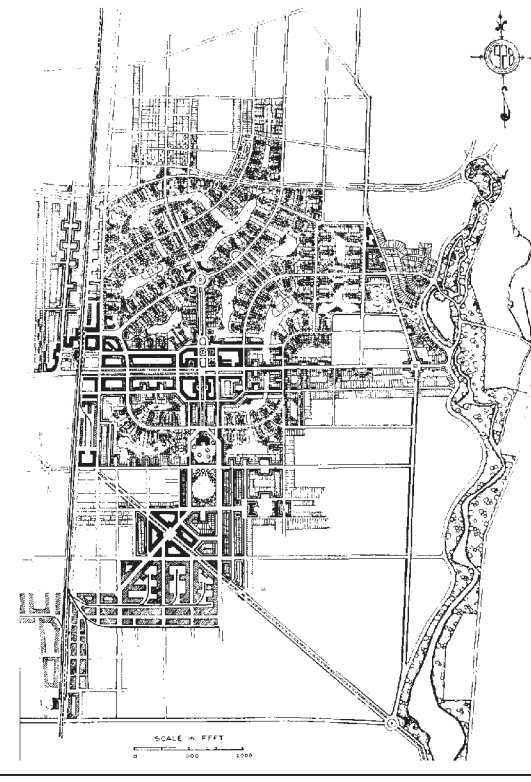
都市計画の中の道路⑭
街路から見た田園都市（その2）

東洋大学国際学部・准教授　志摩憲寿

前回とりあげたイギリスのハムステッド田園郊外における街路の設計思想は、海を渡りアメリカ・ニュージャージー州のラドバーンでさらに展開されることになります。ラドバーンの設計に携わったのはアメリカの都市計画家・建築家のクラレンス・スタインとヘンリー・ライト。彼らは、1920年代に設立されたアメリカ地域計画協会（RPAA）を通じて、ハムステッド田園郊外のバリー・パーカー、レイモンド・アンウィンとも交流があったようです。スタインとライトは、同じくRPAAメンバーのフレデリック・L・アッカーマンと共にニューヨーク州でサニーサイド・ガーデンズを設計した後にラドバーンの仕事にとりかかりますが、その設計思想の基底には、RPAAのメンバーが共有していた大都市の拡散に対する不経済性と文化的伝統へのノスタルジアがあり、それは住宅地における道路と緑地のネットワークとして表現されていました。

ニューヨーク市から24キロ離れた敷地に420ヘクタールの規模で開発されたラドバーンは「自動車時代の都市」として知られています。敷地は12～20ヘクタールのスーパーブロックに分けられ、クルドサックなどを用いて通過交通が入らないようにしたほか、歩行者路と自動車路は交互に組み合わされて完全な歩車分離を実現するなど、交通に対して注意深く設計されています。また、歩行者路は、共同庭園、さらには、学校やプールなどの公共施設にも接続されて緑地のネットワークの枢要を成しています。通過交通排除と歩車分離を実現したラドバーンはその後世界各地のニュータウンや団地計画において、例えば、日本でも千里ニュータウンなどにおいて、試みられることとなりました。ラドバーンの設計は、自動車時代を迎える中で住宅地における街路の設計思想のいわば転換点であったと言えましょう。

ところで、このラドバーンの設計思想の背景には、日本でも多摩ニュータウンに影響を与えたとして知られるクラレンス・ペリーの「近隣住区論」があります。この近隣住区論について次に見てゆきたいと思います。



ラドバーン配置図（出典：タフーリら（2002））

参考文献：マンフレッド・タフーリ、フランチェスコ・ダル・コ（2002）「図説世界建築史第15巻 近代建築（1）」本の友社、日笠端・日端康雄（2015）「都市計画（第3版増補）」共立出版

ハッと思いました

先月18日朝、「大阪で震度6弱発生」のニュース速報。23年前の阪神淡路地震が一瞬よぎりました。丁度、千葉沖のプレートがずれるスロースリップ現象の報告があったり、千葉で震度4、群馬で震度5弱の揺れがあったばかりなので、とても不安になってしまいます。

そうした中、サッカーワールドカップにて、日本がリーグ戦を突破し、一発勝負のトーナメント戦へと勝あがりました。猫も杓子もサッカー評論家、戦術の名策士の如く、うるさい声が世に響き渡り少々うんざり。結果は残念でしたが、楽しめたのは間違いない事ですので選手の皆さんには感謝いたします。

さて、梅雨明けと同時に日本列島では台風、強風、大雨の影響で広い範囲で甚大な被害がでています。気温も一気に真夏の様子。南北に長い日本とは言え、もう少し緩やかな気象状況になら ないものかと思ってしまいます。

明るい日差しの中、顔をあげて歩くようになると、ふと目にとまったものがありました。それは、車道の左側に何やら矢印が。自転車ナビマークです。

自転車は人が乗っているときは軽車両ですから、道路の左側を通行しなければなりません。このマークは、自転車が通行すべき部分と進む方向を示す標示と言うことです。しかし、自転車優先で法令として自転車を保護するものではないとの事。子供やママチャリの女性にしてみれば、自ら危険な車道を通るわけもなく、クルマを避けて歩道を走りますよね。きっと私も。

自転車に関しては、道路の整備のみならず、街並みの整備とあわせて考えていかなければ、一番大切な交通安全の面で遅れていくのではないかな。

それでも忘れてならないのが、自転車利用者のマナーの向上、公共の場における社会人としてのモラルです。

電動アシスト自転車でラクラクはいいけれど飛ばし過ぎじゃありませんか。